

MECCだより

武蔵野・多摩環境カウンセラー協議会広報紙 第16号 2008年3月

もくじ

巻頭言「地球温暖化と環境カウンセラー」	藤井 健史
「環境活動指導者研修講座」後半報告	中西 由美子 堤 恵美子 一條 美智子
人と自然との関係 — 鶉呑みに出来ない話 —	門司 和夫
武蔵野市の環境重点施策について	武蔵野市環境生活部環境政策課 高橋 潤一郎
初めてベトナムに来て	泉 浩二



巻頭言 「地球温暖化と環境カウンセラー」

藤井 健史

京都議定書の第一約束期間が始まりました。

今年の冬は例年になく寒さが続いています。昨年発表された IPCC の第 4 次報告では地球の温暖化の進行は人間の社会活動に起因することが確かであり、温暖化は気候変動その他私たちの生活への影響が大きいことが述べられています。

地球環境が処理できる二酸化炭素の量は人間社会の排出量（約 256 億トン）の約半分に過ぎず、第一約束期間の目標を達成してもなお大気中の CO₂ は増え続け、地球温暖化は進行します。

京都議定書の約束期間に入ったということは CO₂ の排出権取引が始まり、CO₂ に値段がついたということです。すでに排出権市場のあるヨーロッパではおよそ 1 トン当たり 20 ユーロ（約 3,300 円）前後で取引されています。

日本の温暖化対策では基準年（1990 年）の排出量（2.6 億トン）の 1.6% を京都メカニズムで対処しようとしていますから、この値段は約 660 億円になります。また現在の対策のみでは 1.7～2.7% が不足で追加対策が必要とされていますから、これを加えると 1,400～1,850 億円 / 年の費用が必要になります。

さらに増加する大気中の CO₂ 濃度を抑えるためにはとてつもない多額の費用が必要となります。このように見てくると CO₂ の発生に対する環境税の必要なことがわかります。CO₂ 増加の内訳は家庭用と業務用（商業・サービス・事務所等）が多くなっています。つまり我々の消費生活そのものが CO₂ 発生量の増加を引き起こしているのです。ライフスタイルの変革が必要です。ここに環境カウンセラーの役割が見えてきます。

産業界は消費の抑制は経済の低迷を招くといいますが、経済を活性化させてもそれは増加する CO₂ の処理費用を稼ぐための働きになってしまいます。

二酸化炭素の地中貯留など技術開発を頼りにしようにもそのためにエネルギーを使う（CO₂ を発生させる）のでは根本的な対策にはなりません。

「ライフスタイルを見直し、消費の仕方を考え直し、低炭素社会の実現へと進めてゆく」このような動きをリードしてゆくことがこれからの環境カウンセラーの役割であろうと思っています。

0=C=0 0=C=0 0=C=0

「環境活動指導者研修講座」後半報告

中西 由美子

MECCでは、今年度より、環境活動の指導者を志す人達のために「環境活動指導者研修講座」を開催しました。MECCだより14号で、前半の座学中心の講習会の様子をご報告しました。6月以降の後半では、受講生が自身の環境活動テーマに沿って活動を行った経過を、3回の講座で報告してもらい、ディスカッションを行いました。9月29日、12月8日に中間報告会、そして先日2月23日に、最後の最終報告会をもって無事終了しました。

昨年の1月に前準備として、各分野で環境活動を行っている方々に集まっていただき、情報交換会を開いた時から1年以上たち、一連の講座シリーズの試みをなんとか終えることができました。

受講生の数は決して多くはありませんでしたが、受講生の皆さんは、既に独自の環境活動を実践され、

その上仕事や家庭のやりくりの中で多忙な中、熱心に参加してくださり、大変ありがたく思いましたし、有意義な時間を共有できたことに感謝します。

お互いの活動を発表しあい、意見交換するというスタイルは、これまでの養成講座ではほとんどなかったと思います。どんな活動もそうですが、自分で実際にやってみてはじめて学ぶことがたくさんあります。それらは、生きた情報であり、重みのある、現実味のある生きた教材となったはずです。課題も多くありましたが、今回の受講生の方々にも協力頂きつつ、次に活かしていきたいと考えています。

受講生の方々の中から、感想や講座へのご意見を書いていただいていますので、詳しくはそちらに筆を譲ります。

表 2007年度の環境活動指導者研修講座 スケジュール

	年月日	内容
講習会	2007年 4月28日(土)	【全般とコミュニケーション】
	5月12日(土)	【テーマ設定と計画策定】
	5月26日(土)	【計画内容分析と成果評価】
各自の活動実践と 情報交換	9月29日(土)	第1回中間報告会
	12月8日(土)	第2回中間報告会
	2008年 2月23日(土)	最終報告会

講座を受けて

堤 恵美子

環境活動の指導者の心構えや素養について素朴に知りたいと思っていた時に、偶然本講座の案内をいただきました。

平日は会社勤務、休日は家事や家族の世話があり継続できるか迷いつつも、最後はエイヤで受講生にしていただきましたが、本当に良かったと思います。以下、簡単に報告させていただきます。

1. 日頃尊敬する講師の方々や全く異なる分野の受講生の方々と寺子屋のように学び、議論し、解決のヒントを頂けて嬉しかった



です。中々得られる機会があるものではなく有難く感じました。

2. 講座内容のレベルの高さに驚きました。これって経営学?統計学?と面喰いながら、魅力ある内容を吸収したいと真剣にメモをとりました。

私は環境活動を行う上で、マネジメントの重要性を初めて理解しました。今後は、是非習得すべき課題として勉強したいと思っています。

3. 受講生はフラットな関係で、上手くいかない悩み等を報告し合い、カウンセリングしていただく、いわば環境最前線を目の当たりに出来ました。気心を知るようになると、どんどん緑が失われていくデータを前に異口同音に対策がないものかと話し合い、まさに環境の同志であることを感じました。

環境活動指導者研修講座は、プログラムの基本から入り、講演、講座、ワークショップと多様な形で進められ、プログラム作り、実践、成果発表が各々に課せられた。

緊張の中に温かいコーヒーがさりげなく用意され、内容の硬さに反し居心地良く、圧縮された内容を無理なく受け入れられる講座に好感が増した。独自の活動の母体を持っての参加者からのタイムリーな情報も興味深かった。

今後の課題としては、第一に参加者数の確保。分野別の集約。成果発表の方向性。会場案内の徹底等がある。資料は解り易くコンパクトで、手作りの良さ工夫が見えた。会場も参加し易かった。

私は都立高校での講演を課題として進めたが、——次年度から取り入れられる「奉仕」と「環境」を一線に載せ、修学旅行先に決定の「屋久島」をメインテーマに——との難題を示され、資料入手、すり合わせ他で手間取った。しかし、講演では約200名の学生がノート片手に興味を持って耳を傾けてくれ、胸を撫で下ろした。

この講座が充実し、MECCの定例事業として今後も継続されることを願って止まない。講座開催に向け参加協力したいと思う。尚、個々の成果及び達成レベルは講座の意図するところから鑑みて如何だったのか興味の深いところである。



人と自然との関係 — 鶺鴒呑みに出来ない話 —

門司 和夫

近年、上空をカギになって飛ぶ川鶺鴒の群れをよく見かけます。雁の復活と間違える人もいます。敗戦後、一時は絶滅寸前にまで減少してレッド・データブックにも載っていましたが、最近、ついに狩猟鳥に指定されてしまいました。

直接の原因は、河川に人工的に放流されるアユの稚魚を捕食するからという理由です。どうして、こんなことになったのでしょうか？

カワウの増加に伴って、漁業被害が目立ってきました。漁師さんが稚アユを放流すると、待っていましたとばかりにカワウの群れが、それこそ“鶺鴒呑”みにしてしまうのです。これでは漁師さんが、頭に来るのも無理ありません。一体どうしたらいいのでしょうか？

誰でもすぐに思い付く対策は、目のカタキのカワウを捕獲するか追い払うことです。関東10都県だけで、最近3年間で3,500羽以上のカワウが捕獲

されました。2007年4月に行われたロケット花火、案山子、テグス張り等による一斉追い払いの結果、飛来数が35%減少したそうです。

しかし、これらの対策でカワウの総数は減ったのでしょうか？

2006年12月と2007年12月の調査結果では、どちらも約2万羽でほとんど変化ありません。さらに、関東10都県で追い払いした結果、お隣の県である新潟県や宮城県では、最近カワウが増えたようだとの話もあり、総数は減らずに分布を拡げる結果になっている可能性があります。

全国のアユの漁獲量は近年急激に減少していますが、個々の河川で見ると、天竜川、矢作川、物部川など増加傾向の川もあります。これらの川は、天然遡上のアユが増加しているのです。しかし、手をこまぬいて何もしないで増えているわけではありません。様々な対策を講じています。直線的で、わんどや川石が無く、水量が少ない浅い川では魚の隠れる場所もありません。源流域から途中のダム、河口域の干拓問題まで水域全体の生態系を総合的な環境問題としてとらえて、中長期的に復元していくのが正道でしょう。

カワウも、放流され密集した状態の稚アユの群れを襲って楽をして生きるより、天然のウグイやフナを必死に追いかけて食べたほうが野鳥として本望ではないでしょうか。人も自然界の一員であり、生態系の物質循環との調和が望まれます。



カワウ

武蔵野市の環境重点施策について

今年2008年は、いよいよ京都議定書の約束期間の始まりの年となりました。ご承知の通り、現在最も深刻な環境問題といえば地球温暖化問題が挙げられます。地球温暖化問題に関しては、国際間でさまざまな会合が持たれ、各国政府レベルでいろいろな取り組みが模索されています。

地球温暖化は予想を上回るペースで進行しています。過去10万年で5～8℃くらいしか気温変動がなかった地球が、この100年で0.74度平均気温が上昇しており、武蔵野市内に限って言えば、ヒートアイランド現象も重なって、この80年間に2.2℃も平均気温が上昇しています。

今、地球に重大なことが起きている。地球温暖化とは、今すぐ行動を起こさないと手遅れになる差し迫った問題なのだ。という危機感が、私たちの中で共有されつつあると思います。

武蔵野市は平成18年に環境基本計画を策定し、
〈くしくみづくり〉〈ライフスタイル〉〈緑と水〉
〈交通・運輸〉〈景観・まちづくり〉〈健康・安全〉

初めてベトナムに来て

JICAシニアボランティアとして、2月14日～4月10日まで、ハノイの中小企業振興支援センター(SMEDEC)に指導科目「環境管理」(グリーン調達に関するセミナー講師、中小企業の環境配慮・管理指導)で派遣されています。

ベトナムは初めてで、赴任前は忙しく、JICAの2日間の派遣前研修以外殆ど現地情報はなくやってきました。来て見ると、ハノイはかなり寒く(ジャンパーを着ています)、天気の良いか大気汚染のせい、空が霞んでいてマスクをしたくなるような状況です。また、車、特に二輪車が多く、交通は相当混雑している状況です。

バスに乗ったとき、若者に席を譲られました。この国では、年寄り(年上?)にはそのようにする習慣のようです。それに引き換え、交通は歩行者無視で、しかも信号が少なく、とても子供、年よりは危なく

武蔵野市環境生活部環境政策課 高橋 潤一郎

の6つの側面から地球環境への取り組みを進めています。計画では、地球温暖化問題を最重要課題と位置づけており、緑を守り増やしていくこと、省エネルギー型のライフスタイルを確立していくことを大きな目標としています。

当市は家庭部門及び業務部門の温室効果ガス排出量構成割合が高いという地域特性があります。家庭部門に向けては、家庭の省エネを強力に押し進めて行く方策として、新エネルギー・省エネルギー機器の設置助成制度を実施し、事業部門に向けては、環境に配慮した事業活動を促進するために、グリーンパートナー制度(環境に配慮した事業活動に対する認証制度)を実施しています。

また、武蔵野市は平成12年3月に多摩地域の自治体で初めてISO14001の認証を受け、事務事業から発生する温室効果ガスの削減に継続的に取り組んでいます。

今後とも本市の環境行政に、一層のご理解ご協力を宜しくお願いいたします。

泉 浩二

て道路を横断できないのではと思うような状況です。この落差はとても印象的です。

一番の強い印象は?といえば、やはりこの交通です。本当に、出歩くのに気後れがしてしまうほど道路を渡るのは、命がけ?の状況です。二輪車の洪水の中を、決して走ったり、戻ったり、立ち止まったりせず、ゆっくりしたペースで歩けば、車が避けて自分の前か後ろを通過してゆきます。

このように感じてしまうのはよそ者だからでしょう。この国ではこれが当りまえで、四輪、二輪、自転車、歩行者が道路上を一見無秩序に行き来しており、よく事故・喧嘩が起きないと感心します。交通法規でなく暗黙の了解のもとでの交通ルールで、個人の研ぎ澄まされた移動能力で自立的に交通秩序(あれが秩序か?)が保たれ、交通が機能しているのです。

仕事の話は、帰国後ご報告したいと思います。

発行者 : NPO 武蔵野多摩環境カウンセラー協議会 (MECC) 事務局

180-0023 武蔵野市境南町1-30-1 Tel & FAX : 0422-31-7200

電子メール : QWK11724@nifty.ne.jp

ホームページ : <http://www.mecc.or.jp/>